

生活科・飼育单元における学習過程と子どもの思考
の変容：
期限付きモルモット貸出事業を活用した実践の量的
・質的検討

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本生活科・総合的学習教育学会 公開日: 2019-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田宮, 縁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026782

生活科・飼育単元における学習過程と子どもの思考の変容

～期限付きモルモット貸出事業を活用した実践の量的・質的検討～

静岡大学 田宮 縁

1 研究の背景と目的

1-1 生活科・飼育単元の現状

生活科の内容「(7) 動植物の飼育・栽培」では、継続的な飼育、栽培を行うことを通して、子どもが生命の尊さについて実感をともなった学びをえられることをねらっている。

学校現場における動物飼育に造詣が深く、獣医師でもある中川（2006）は、「期待される動物飼育の体験の意義」として、「生命の大切さを学ばせる」、「愛する心の育成をはかる」、「疑似育児体験」、「緊張をやわらげる」などをあげている。抱いたときにあたたかさを感じ、目を合わせたときに感情を読み取れる動物の存在により、子どもたちは心を動かし、動物に喜ばれることをしている自分の存在、自分の命の大切さにも気付くことを強調している。

学習指導要領の内容や動物飼育の教育的効果を受けた形で、生活科の教科書を見ると、モルモットなど温かみのある動物と触れ合い、にこやかに笑う子どもの写真が紙面を飾り、飼育方法が掲載されている。「いつか自分たちもモルモットを飼うのだろう」と期待に胸を膨らませ授業に臨む子どもも少なくないと語る教員もいる。

一方、実践をみると、近年ではモルモットの教室内飼育（加藤,2015 など）、ヤギやヒツジなど中型哺乳類を生活科や総合的な学習の時間等に取り扱っている実践報告（三星,2012）も見ら

れるが、温かみのある動物を扱った実践自体が、「安全上の問題から休日当番が難しくなり、えさのやりくりや衛生上の問題等から、学校での動物飼育が低迷している。生活科にも学区の獣医師と連携するように書かれているが、現場は児童のアレルギーや鳥インフルエンザを理由に飼育をやめている」（日置ら,2009）ところもあり、限られてきている。

学校に飼育小屋があつたにしても動物は存在せず、物置になっている学校も見受けられ、飼育に関しては、「学校周辺の地域にいる昆虫や魚類を飼育し、お茶を濁している」（田宮,2012）状況にある。学校での温かみのある動物の継続飼育については、生活科発足当初からその難しさが指摘されていた。例えば、柿崎の研究（2015・2016）で扱っている1986年から3年間の実践（「ヤギを飼う暮らし作り」）でも、担任である柿崎の転勤にともない子どもたちとヤギとの別れで単元が終了する。それについては、『生活科 紙を作る・ヤギを育てる』（平林・柿崎,1992）の第I部の「討論」で、編集委員の一人である谷川駿太郎とのやり取りの中で詳しく述べられている。

谷川：ヤギと別れなくちゃいけない、一番の理由はなんですか。あなたが、他の学校に移るから？
柿崎：はい。

谷川：あなたが移ると、学校では、子どもたちは

もう飼えないんですか？

柿崎：飼えないですね。

谷川：どうして。

牛山：それをフォローする学校の体制がなくなるから。(注：編集委員 牛山栄世)

谷川：三年間飼ってきても、子どもたちが自分たちで飼える体制までは、先生がもっていけないわけね。

柿崎：学校の体制として飼えないんです。

谷川：じゃあ、学校が拒否するの。管理側として。

柿崎：それと、新しい担任がヤギをあまり好きでなかったりすると、子どもとの関係がぎくしゃくしてだめになったり。

(平林・柿崎,1992,p.49)

現在もなおクラス解体後の見通しが立たないまま教室内飼育ですら踏み切ることが難しい(森田,2006 など)と、学校における継続的な動物飼育の困難さが続いている。

1-2 動物園との連携による動物飼育の実現

静岡市立日本平動物園では、以前より出産間近なモルモットの期限付き貸し出し(長期休暇をはさまない2ヶ月間)という全国的にみても珍しい取り組みをしていた。しかし、この取り組みは、日本平動物園のホームページ上の「学校向けカリキュラム」には掲載されておらず、一部の小学校との連携にとどまっていた。そこで、筆者は、数年前よりこの取り組みを活用した飼育単元を複数の小学校に実践してもらい成果と課題を明らかにしてきた(田宮・長田・片野,2012、田宮・増田・鈴木,2015)。また、業者から借り受けた中型哺乳類で飼育単元を実施している小学校や動物園から譲渡されたモルモットの飼育を行っている複数の小学校を参観し、教師へのヒアリングも実施した。

これらの結果を踏まえて構築した「期限付きモルモット貸出」のシステムと「モデル指導計

画」をセットで、さらに複数の研究協力校に提供し試行した上で、平成28年度より日本平動物園では、「期限付きモルモット貸出事業」¹⁾を本格的に実施している。

1-3 本研究の目的

本研究では、日本平動物園の「期限付きモルモット貸出事業」を活用した生活科の飼育単元における学習過程と子どもの思考の変容の内実について、テキストマイニングによる分析を用いて量的に分析した上で、質的に考察する。

2 本研究で扱う実践について

本研究で扱う実践は、「期限付きモルモット貸出事業」の試行として平成26年度に行われたものである。その一部は、「企業や機関との連携を生かした生活科における動物飼育」(田宮・増田・鈴木,2015)でも取り上げられている。本節では、先行研究で明らかにされている実践の概要を示すとともにその課題と先行研究と本研究の目的の差異を述べる。

2-1 第2学年「ぼく・わたしはモルモットの飼育員(全19時間)」の概要

2-1-1 本単元の目標

モルモットを飼育することを通して、自分が世話をすることが、モルモットの生命を守ることにつながるということに気づき、生き物を大切にしたり、相手の気持ちを考えて行動したりする大切さを実感する。

2-1-2 主な学習活動

9月から本単元の開始を見据え、6月に日本平動物園のゾウの飼育員(山本さん)と連携し、国語科で単元「動物園の飼育員さんについて調べよう」を学習した。そして、9月に入り、山本さんから「日本平動物園にはモルモット貸し出し制度があること」、「モルモットの飼育員をやってみないか」との内容の手紙が届く。飼育するかしないかをクラスで話し合い、その後モルモットの生態

や世話の仕方を調べ、9月18日に日本平動物園から3匹のモルモットとケージを借りてきて、12月1日まで教室内で飼育した実践である。

本実践では、子どもの主体性を重視し、単元計画では「期限付きモルモット貸出事業」で示した「モデル指導計画（単元の計画）」のみを子どもたちに投げかけることとした。モデル指導計画は以下の通りである。

- ①「モルモットの貸し出し制度」について知り、飼うかどうかをクラスで話し合う。
- ②モルモットの生態や世話の仕方を調べる。
- ③動物園に行き、モルモットの飼育の仕方を飼育員さんに教えてもらい、モルモットを学校へつれて帰る。
- ④名前を決める。飼育当番を決める。
- ⑤日常的な世話や観察
- ⑥学習の成果を発表する。
- ⑦A1版（ヨコ）のポスターを作成
※学習のまとめとしてのポスターを作成し、モルモット返却後、動物園に掲示する。
- ⑧モルモットとお別れ

2-2 先行研究（田宮・増田・鈴木,2015）における学習過程

対象とした実践での子どもの学習過程は、表1の通りである。担任の想定外の活動（「飼育日誌をつけたい」、「土・日のホームステイ」）は生活科の授業外で行われた活動であり、学習過程には含まれていない。また、当初、発表の場（「モルモットを他の人に知らせたい」）は対象校で毎年実施している研究協議会のみを想定していたが、多くの人に知らせたいという子どもの思いから、2週間後に保護者参観会、さらに、1年生の学年集会の合計3回、「2年1組ふれあいどうぶつ園」を行うこととなった。

2-3 先行研究における課題

先行研究は、企業や機関との連携を生かした生活科における動物飼育を概観するとともに、特に地域の企業や機関との連携に注目し、連携による効果と連携先との関係づくりについて検討することを主眼としていた。そのため本実践についても授業内での話し合いの記録に基づき学習過程を概観したものであり、個々の子どもの思考の変容の内実にまで言及していない。

表1 学習過程

時数	学習過程	No.
1	動物園でモルモットを貸してくれるよ	①
2~5	モルモットのことを調べよう	②
6~9	モルモットを迎えに行き、モルモットの飼育員になろう	③
10	飼育当番が一回りしたね モルモットのことで見つけたことあるかな	
11~13	研究協議会にはお客さんが授業を見に来るよ お客さんにどんなことを伝えたいかグループで話し合おう	
14	2年〇組ふれあい動物園を開こう	④
15	新しい疑問やクラスみんなに言いたいことがある人がいるね。 整理しよう	
16	参観会で2年〇組ふれあい動物園パート2をやろう	⑤
17	飼育員さんからの意見をFAXで送ってもらったよ モルモットが教室にいるのも、あと1ヶ月。これからどうしていく？	⑥
18	お別れ会は、どんな会にしたい？ お別れ会は、どんなことしようか？	⑦
19	モルモットとお別れ会をしよう	

そこで、本研究では、「振り返りカード」に着目し、データマイニングの手法を用いて子どもの思考の変容の内実を検討する。なお、テキストマイニングには、樋口耕一氏によって提供されているフリーのテキストマイニングソフトであるKH Coder²⁾を使用した。

3 分析の手順

3-1 「振り返りカード」について

本実践では、図1に示した11回の学習活動の後半約10分で振り返りの時間を設け、クラス全員（35名/男児18名・女児17名、各回34枚の提出）で取り組んだ。

3-2 「振り返りカード」の選定について

本研究では、振り返りの項目が「1.今日の授業についての日記」と「2.今日の授業の疑問」の2項目の「振り返りカード」（表1の①~⑦）

を分析対象とした。

分析対象となる「振り返りカード」の文字数（漢字に変換）は表2の通りである。

表2 「振り返りカード」の文字数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1. 今日の授業についての日記	1,346	2,746	2,606	3,692	4,199	3,912	2,200
2. 今日の授業の疑問	1,171	1,085	762	493	584	141	48
合計	2,517	3,831	3,368	4,185	4,783	4,053	2,248
平均	74.0	112.7	99.1	123.1	140.7	119.2	66.1

4 結果と考察

4-1 各回の抽出単語数

それぞれの回において、出現数の上位 20 件を抽出したものが表3である。共起ネットワークを参考に考察を進める上でキーワードとなる単語については、背景色を付している。

表3 抽出単語数

①		②		③		④		⑤		⑥		⑦	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
モルモット	56	分かる	53	飼育	51	お客	53	思う	25	鈴木さん	32	モルモット	37
エサ	29	モルモット	48	当番	32	モルモット	40	お客	24	モルモット	26	お別れ会	29
借りる	29	知る	36	モルモット	31	思う	38	今日	24	鳴き声	24	思う	19
心配	22	不安	29	今日	27	今日	24	人	21	思う	23	今日	17
掃除	20	遊び	22	好き	23	知る	22	ふれあい動物園	19	必要	23	寂しい	17
死ぬ	18	前	20	ふれ合う	21	言う	17	モルモット	17	散歩	19	会	16
分かる	18	減る	13	時間	21	来る	16	言う	16	分かる	18	楽しい	14
知る	14	調べる	13	決める	18	嬉しい	14	モットちゃん	14	時間	16	最後	9
お世話	13	理由	13	調べる	14	調べる	13	知る	14	今日	15	別れ	8
飼う	12	遊ぶ	12	日誌	14	切る	11	嬉しい	13	言う	13	悲しい	7
量	12	好き	11	知る	13	爪	11	パート2	12	調べる	12	楽しむ	6
仕方	8	思う	11	昼休み	12	触る	10	モルちゃん	12	爪	12	考える	5
思う	7	何故か	9	番号	12	たくさん	9	分かる	11	ふれ合い	11	鈴木さん	5
聞く	7	楽しむ	8	量	12	ふれ合う	9	妹	9	教える	11		
飼育	6	気持ち	8	モットちゃん	11	伝える	8	あと	8	知る	11		
責任	5	勉強	8	モルちゃん	11	ふれあい動物園	7	ミッちゃん	8	かじり木	10		
		ピーマン	7	野菜	11	頑張る	7	楽しい	8	ふれ合う	9		
		後ろ足	7	ミッちゃん	10	緊張	7	緊張	8	見る	9		
		消える	7	頑張る	10	分かる	7	飼育	8	発表	9		
		食べる	7	書く	9	書く	6	お母さん	7	あと	8		
				食べ物	9	研究	6	説明	7				
						人	6	前	7				
						注意	6	弟	7				
						発表	6						

4-2 共起ネットワーク分析

共起ネットワークとは、テキストの中で用いられた語と語の関係性を示したネットワークであり、「振り返りカード」の中で用いられている単語間の関係性を意味している。図1は、頻出単語数の結果について図で示したものである。図における円の大きさは単語の出現数を、円の背景色の濃淡はネットワークにおける中心であることをそれぞれ意味している。ただし、同心円の距離は意味をもたない。

4-3 共起ネットワークの検討

共起ネットワークの結果から、一連の単語のつながりとネットワークの関係性のうち、特に

注目すべき語、つながりや関係性を以下に示す。

- ・ 「心配-死ぬ-借りる」と「不安-減る-理由-前」のネットワークの関係性（表3①②）
- ・ 「飼育」を中心とした「飼育-決める-当番-番号」と「飼育-日誌」のつながり（表3③）
- ・ 「お客さん-嬉しい」のつながりと「緊張」の内実（表3④⑤）
- ・ 「モルモット」と「ミッちゃん」、「モットちゃん」、「モルちゃん」の関係性（表3⑤⑥⑦）
- ・ 「爪-切る」の意味（表3⑤⑥⑦）
- ・ 「お別れ会-寂しい」と「お別れ会-楽しい」の関係性（表3⑦）

4-4 考察

考察に使用する振り返りカードの文面は、テキストマイニングの分析するために漢字に変換したものを使用する。なお、文末等にはイニシャルを示した。

4-4-1 「心配-死ぬ-借りる」から「不安-減る-理由-前」への変容の内実

【「心配」からのスタート】

第1回の振り返りカードでは、「心配-死ぬ-借りる」を子どもは次のように表現している。

「モルモット借りたいな。でも心配です。何故かという、うまく飼育できなくて、死んでしまうかもしれないからです」(R.0)。そして、一方で、「モルモットのエサはどれだけあげるのか、飼育員さんに聞いてみたい」(R.0)とも記述している。このように、第1回の振り返りカードには、葛藤と共に課題を解決していく方法(飼育員さんに聞く、図鑑で調べる)や何を調べたらよいのか(掃除、エサの量、抱き方)が述べられていた。

また、「借りたいです。モルモット。でも、死んでしまったら、責任取れないから、分からない」(F.1)と、少数ではあるが、「責任」という語を使用している子どもも見受けられた。ここ

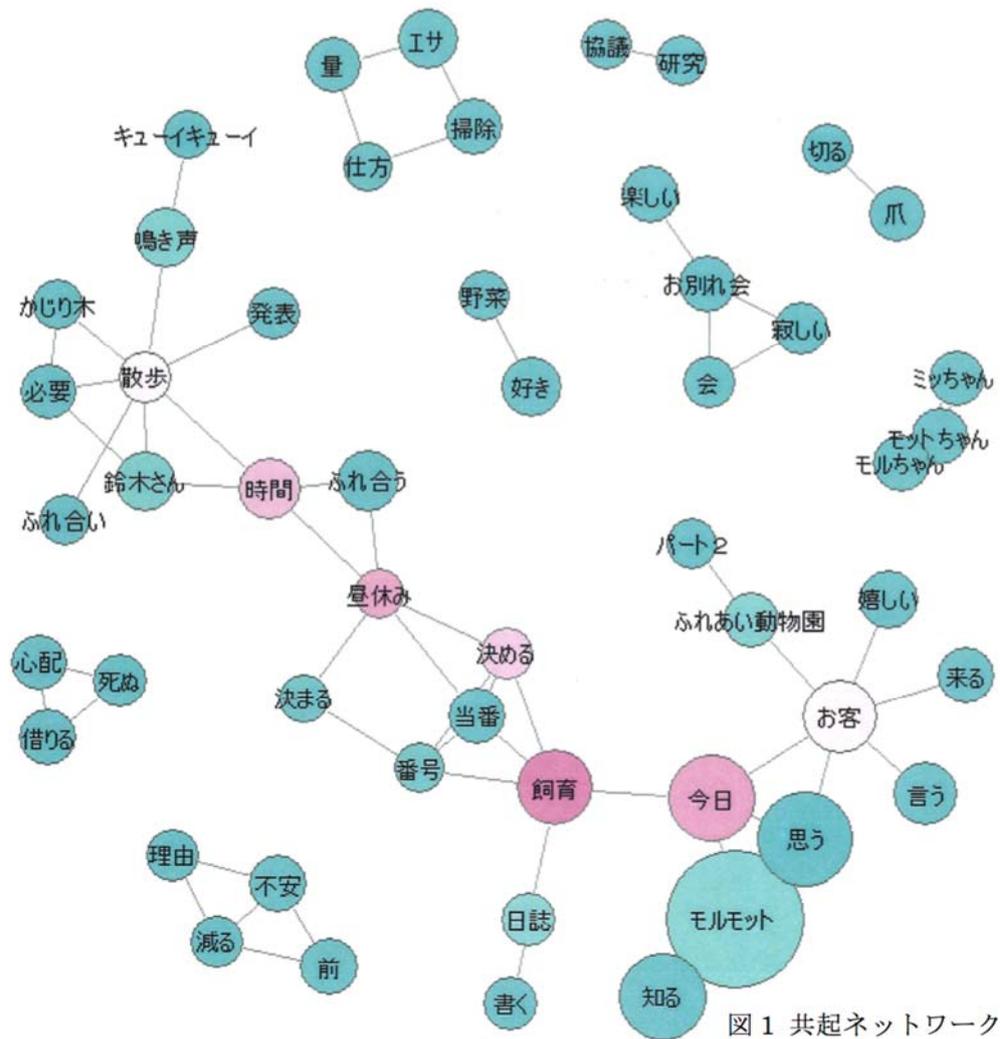


図1 共起ネットワーク

で使用されていた「責任」には、「モルモットの命に対しての責任感」と「動物園から借り物であるということ」の2つの意味があるということが明らかになった。

さらに、すでにこの時点で「でも、土日のエサや、量や、掃除をどうすればいいか分からないし、(略)」(A)と土・日の世話について言及している子どもの存在も確認できた。単元後半の子どもが発案による「土・日のモルモットのホームステイ」の伏線は、単元開始直後から子どもたちの中に敷かれていたということである。

【情報の収集と整理】

子どもたちは、4時間をかけて、モルモット生態や世話について調べた。教室には、休み

時間にも調べられるようにモルモットの飼育に関する本(7種類14冊)を環境として準備した。

「この前、モルモットが、死んでしまうかもしれないという不安が、なくなりました。どうしてかという、この前は、モルモットのことを何にも知らなかったけど、本をいっぱい読んで、不安が消えました。楽しみな気持ちが増えました」(K.H)、「(略) だももっと知りたいと思いました。すごく楽しみです。早く来てほしくてたまりません。不安が減りました。理由は、みんなで勉強したからです。もっといろいろみんなで勉強を、頑張ります。楽しみです」(Y.K)と第1回の思いと比較しながら、モルモットの生態や世話などについて調べることで不安が減ったと述べている子どもが多数存在した。知ることによって不安は減ること、そして知ることの喜びについて学習活動を通して実感したようである。

また、「足の皮がむける病気があることが、はじめて分かった。この前よりも、心配な気持ちが減った。何故かという、いろんなことを調べてきたから」(K.H)から、子どもたちが使用している「不安」という語は「心配な気持ち」と同じ意味合いで使用していたのだろう。

【モルモットも人間と同じ】

学習活動を通してモルモットの生態や世話を知ることだけでなく、「病気になった時、人間と同じだと思った。この前より、不安な気持ちがなくなった。(略)」(F.I)、「モルモットも人間みたいにモルモットそれぞれ。理由は食べる量が違うから。モルモット飼えるかなとわくわくしてくる。理由はいっぱい調べたから」(K.O)というように、人間と同じように命があり、個性があるということに気付くことで不安が減少することが示された。モルモットを自分に置き換えられて考えられる、つまり、擬人化して考えればよいと気付いたとき、モルモットとの心

理的な距離が縮まり、不安が軽減されていく。

この時点で「何で遊ぶのか?モルモットは何が好きなのか」(R.S)と、すでに環境エンリッチメントにまで言及していることが確認された。「遊びは何が好きなのか知りたいです。モルモットはどんな子が分かってきました。ちゃんと世話をすれば、死ぬことなんてないと思います。モルモットが来るのが楽しみです。なぜかという、もう飼育員さんに近づいているから、自分が飼育員さんになるのが楽しみだから」(M)というように、モルモット世話だけでなく、さらに幸せな暮らしを考えている時点で、飼育員さんに近づいたということ子ども自身が実感したのだろう。このように子どもたちは「飼育員さんごっこ」に引き込まれていった。

4-4-2 環境エンリッチメントへの言及

【モルモットの幸せな生活】

第3回は、モルモットを動物園に引き取りにいった当日、小学校へ戻ってからの授業の振り返りカードである。その授業は、「名前を付けたい」→「飼育当番を決めたい」→「飼育日誌をつけたい」という子どもたちの思いで展開されていた(田宮・増田・鈴木,2014)。

第3回は、「飼育」、「当番」、「モルモット」の抽出語の出現回数も多く、「飼育-決める-当番-番号」と「飼育-日誌」の関係性が強い。

「今日、飼育当番と、ふれ合う時間を決めました。飼育当番をつくるのに、僕は、番号順に賛成でした。ふれ合う時間は、昼休みに賛成でした。それで、僕の考えに決まりました。これから、この仕事を頑張っていきたいなと思いました」(R.S)と3つの案を話し合った結果を確認し、飼育への意欲を示している。田宮・増田・鈴木(2014)にも述べられている通り、「モルモットのために一番いい方法をとりたい」という共通の思いがあったと理解することができる。

また、子どもたちからの発案で実施することになった飼育日誌については、「飼育日誌は、うんちの量、様子、水の量、干草の量の5個だけ、書く事は、もっとありそうだから、見つけたい。ふれ合う時間は昼休みだから、ちょっと休憩の時間もモルモットが欲しそうだから。休憩の時間や、ふれ合う時間（何分～何分まで）を決めたいです」（A.Y）と述べられおり、「5項目」（原文のまま）以外にも「書く事は、もっとありそう」と深く観察しようとする意気込みもみられた。さらに、モルモットも「休憩の時間」が欲しいのではないかと、モルモットの幸せな生活への願いを読み取ることができる。

【モルモットの個体差への注目】

モルモットの名前を決めたことで、「モルちゃん」とミツちゃんとモットちゃんの好きな食べ物が知りたいです。なぜなら人間でも『何が好き』と聞くと、みんな好きなものが違うからです。それが分かったら、何が好きか分かるし、あげたい物も残さず食べてくれるかもしれないからです」（A.K）と、3頭を「モルモット」というひとくくりで考えるのではなく、個性や好みを配慮し、それぞれの幸せを考えていることを読み取ることができる。さらにこのA.Kに関しては「人間でも、『何が好き』と聞くと、みんな好きなものが違う」とモルモットについて考えることを通して、人間も一人一人個性をもった存在であるということにまで言及していた。

4-4-3 ミニ飼育員さんになっていく過程

【「お客さん-嬉しい」の内実】

共起ネットワークの「お客さん-嬉しい」に注目してみると、「2年1組ふれあい動物園」（第4回）と「2年1組ふれあい動物園パート2」（第5回）の双方で「お客さん」、「嬉しい」という抽出語の出現回数が多いことがわかる。しかし、その振り返りの記述をみると、その内実

が全く異なっていた。

第4回では、「今日、お客さんが来て、言う時緊張した。でも見ないでできて、全部間違えなくて言えたから良かったです。だから、すごく嬉しかったし、上手に言えて良かったです。お客さんもいっぱい来て良かったです。またやりたいです」（S.O）というように、嬉しさの内実は「間違えなくて言えた」こと、「頑張っでできたこと」、「教えてあげられた」こと、「来てくれた」こと、「かわいいねと言ってもらった」こと、「上手にできた」ことなど自分がお客さんにしてあげたり、してもらったりすることが中心だった。

一方、第5回では、「研究協議会よりもいっぱい触ってもらえてとても嬉しかったです。お客さんが、みんなミツちゃんを触っている時に、とても嬉しそうで、いい顔をしていたことが、一番嬉しかったです。ふれあい動物園は、大成功だと思いました。（略）」（S.K）と、お客さんの嬉しそうな顔をみるのが嬉しかったと、お客さんの姿を見る余裕とお客さんの喜びを自分の喜びと感じとっていることが読み取れる。また、「嬉しい」という語は使用していないが、「（略）お客さんは楽しんでくれたかなと思いました。楽しいです。（略）」（S.S）というようにお客さんの心情に注目し、それについて評価している記述が中心だった。自分から相手の側にたった「嬉しさ」へ変容していることが確認できた。

【「緊張」の内実】

共起ネットワークには示されていないが、「緊張」という語に注目してみると「お客さん-嬉しい」と類似の心理的変容がみられる。

第4回の「緊張」は「今日は、モルモットの紹介をする時に、すごく緊張したけど、上手にできたから嬉しいです。（略）」（S.S）というように、お客さんが来ていることやお客さんへのモ

ルモットを紹介についての記述のみだった。これに対して第5回は、「2回目で、ちょっと緊張したけど、言えて良かった。もう1つ、緊張したことがあって、小さい子が、モットちゃんを落とさないかなーって、すごく緊張したけど、みんな落とさなかったから良かった。(略)」(F.I)と、モルモットの紹介は「ちょっと緊張」に対して、モルモットの命に対しては「すごく緊張」したと記述している。「緊張」という語は使用していないもの同様の記述が複数存在していた。回数を重ねたり、対象が変わったりすることで、「緊張」の内実も変容していく。

【本物の飼育員に近づく】

第4回目の記述にも飼育員という語は使用されていたが、第5回では「(略) 私は、ミツちゃんの飼育員でした。弟や妹が触る前に、『椅子にちゃんと座ってね』と言いました。あと、お父さんやお母さんみたいなお家の人が触っている時に、質問がありました。私たちは、その質問に答えられたから、本物の飼育員だなと思いました。あと、モルモットといられるのが1カ月なので、何でもやってあげたいです」(A.K)という記述や飼育員という語は使用していないが、「(略) 何も知らないおじいちゃん、おばあちゃんそれに、妹や弟が楽しんでくれて良かった。ふれあいの時に、僕がお客さんにこう言いました。『ふれあいが終わったら、水道で手を洗ってください。』って言いました」(S.O)というようにモルモットの説明だけではなく、お客さんの状況に応じて飼育員として対応している自分への気づきが述べられていた。

また、前述のA.Kの「私はミツちゃんの飼育員でした」というように、第5回では、「モットちゃん」、「モルちゃん」、「ミツちゃん」と個体名を挙げて記述する子どもが多くなった。3匹をひとまとめに総称する「モルモット」ではな

く、個体の特徴を前面に出していた。動物園の飼育員さんも説明をする際に、「ゾウ」と、飼育している2頭以外も含めた総称で動物の説明をする場合と「シャンティさん」、「ダンボさん」と名前をあげて個体の特徴について語る場合がある。第4回も第5回も担当を決めてふれあい動物園を開催したが、第4回の記述では、個体の名前を使用した記述は3名にとどまっていた。「2年1組ふれあい動物園パート2」では、子どもたちは意識していないかもしれないが、個体の名前で語っていたようだ。そこには、個体の名前をあげ、その特徴や性格を自慢げに語る飼育員の山本さんの姿と重なるものがある。振り返りの時間には、より本物の飼育員らしくなっていく自分自身に気付いていく姿を読み取ることができた。

【2年1組ふれあい動物園パート3へ】

お客さんが研究協議会の参観者と参観会に参加した家族という差はあるが、上記のように回を重ねることで「お客-嬉しさ」、「緊張」の内実が変容していること、また、子ども自身も本物の飼育員さんに近づいていく自分をメタ認知していることが明らかになった。

「(略) Aちゃんの妹やRくんの妹、Sくんの弟や私たちより小さい子もいっぱいモルモットの注意や特徴、性格を分かってもらって、とても良かったです。また、パート3を学年集会とかでやってみたいです。(略)」(M.A)というようにふれあい動物園は、子どもたちの有能感や有用感を高めるものであったに違いない。体験の心地よさがパート3へと子どもたちを導いていくこととなる。

M.Aは、パート3は「学年集会」と実現可能な機会を模索し、提案している。「ぼく・わたしはモルモットの飼育員」という明確なイメージが3回の「ふれあい動物園」を実現させたのだ

ろう。

4-4-4 「爪切る」から読み取れる自己認識

【自分たちはミニ飼育員】

1回目のふれあい動物園で「(略) 1人のお客さんは、3匹飼っているそうです。その人に、慣れてきたら爪を切った方がいい。病気になってしまうよと言ったので、今度やってみたいと思いました。お客さんに教えてもらって良かったです。(略)」(R.Y)と、自分たちのしていない世話について助言をもらったこと、爪を切る道具や方法についての記述が8名の子どもの振り返りカードにあった。ふれあい動物園終了後、単元の中盤にモルモットの飼育員(鈴木さん)にFAXで問い合わせることとなる。

第6回の振り返りカードでは、「モルモットの爪切りが、鈴木さんでも1年くらいだから、ちょっと僕たちは、ちょっと難しそうだから、ちょっと僕たちにはやれないと思いました。モルモットにはまだまだやることあるのかなと思いました」(A.N)というように、爪切りはプロの飼育員でも熟達には1年間を要することを記述した子どもが多く存在した。そして、「(略)早く、鳴き声の意味を観察して、かっこいい飼育員になりたい」(K)、「鈴木さんのおかげで、みんなが解決できたと思いました。だって、一人前の飼育員だからです。(略)2-1の35人のみんなは、ミニ飼育員です。一人前の飼育員のようなことができるといいと思います!!」(T.H)との記述のように自分たちは「ミニ飼育員」であることをあらためて認識し、自分たちができそうなことから挑戦しながら、「一人前の飼育員」、「かっこいい飼育員」をめざそうという願いを持ちながら後半の飼育活動に取り組むこととなる。

4-4-5 お別れ会の意義

【寂しさを乗り越えるための儀式】

お別れ会については、Y.Sの「(略)モルモットとお別れするのは寂しいです。けど、寂しいけど楽しい会にモルモットに良かったと思える会にしたいです」との記述のとおり、「お別れ会-寂しい」が「お別れ会-楽しい」会にしたい。「みんな」も、そして「鈴木さん」にとっても楽しい会にという思いを抱いている子どもが大半を占めていた。ここでもモルモットの幸せのことを第一に考えていることが読み取れる。

【リアルごっこ遊びから学習活動への変容】

また、「やっぱし寂しいけど、自信を持ってやってあげて、(略)」(R.Y)と「自信を持って」、「頑張りたい」、「上手にできるといい」との記述からは、ミニ飼育員である自分を客観視している姿、「飼育員ごっこ」という「リアルごっこ遊び」から学習活動への心理的変容がみられた。

子ども主体のお別れ会は、モルモットとの別れの寂しさとともに、モルモットの命を守り通したことへの自信とモルモットのいる生活から新たな生活、学習への期待とが共存する場となっていたのではないだろうか。お別れ会の意義は、子ども自身が新たな世界の扉を開くことにつながるのだろう。

5 結語

本実践は、子ども自身が「飼育員になる」という明確な目的を持った「ごっこ遊び」という体裁をなしている。子どもは、「一人前の飼育員」、「かっこいい飼育員」になろうと飼育員ごっこに没頭していく。しかし、ごっこに飲み込まれることは決してない。遊び手は、遊びが織りなす非現実性の中に没頭するが、遊び手はその非現実の中にいるということを常に認知している。本実践でも「ミニ飼育員」であること自覚しながら、飼育員ごっこに没頭していく活動場面と没頭していく自分の姿を客観視する振り返り場面の双方を往還しながら学習活動は展開されていた。

本実践は、命を預かるという点で、単なるごっこ遊びとは一線を画すものであり、ごっこ遊びという体裁はとるもののモルモットの飼育という現実的な体験が保障されている。つまり「リアルごっこ遊び」という設定が子どもたちを活動に没頭させ、本物の学びに導いていくということだ。

モルモットは、教師にとっては教材ではあるが、子どもにとっては生活の中で心の中心を占め、教材以上の関係を築いていった。大まかな計画はあったものの複数回にわたるふれあい動物園、土・日のモルモットのホームステイ、子どもが計画したお別れ会など子どもと教師がともに単元を織りなしていた。教師ではできないことをモルモットが引き受けてくれていることを教師自身が理解し、先走ることなく子どもたちの姿を支える教師の存在は見逃せない。

最後に、小学校でモルモットを飼育している加藤（2015）の実践では、「爪を切ること」という子どもの発言が記されていたが、本実践では「爪を切る」場面はない。期限付きの動物飼育の限界を意識した上で、ストーリー性を重視した単元を構成していくことが「期限付きモルモット貸出事業」の要諦となってくる。

注 1) 日本平動物園 HP

<http://www.nhdzoo.jp/school/index.html>

2) KHCoder <http://khc.sourceforge.net>

引用・参考文献

ジャック・アンリオ（佐藤信夫・訳）.（1986）.遊び—遊ぶ主体の現象学へ.白水社.

平林裕一・柿崎和子.（1992）.生活：紙を作る・ヤギを育てる（シリーズ「授業」編集委員会編 6）.岩波書店.

柿崎和子.（2015）.「羊飼育」における学びの可能性：体験活動と表現活動を軸にして.生活科・総合のブックレット,9,68-81.

柿崎和子.（2016）.生活科・総合的学習の体験活動における豊かな学び：デュイの「経験概念」と「思考論」に基づいた「ヤギを飼う暮らし作り」の実践の考察を通して.せいかつ&そうごう,23,52-61.

加藤直子.（2015）.モルモットの飼育単元における自分自身の成長を実感する実践：仲間の言葉と価値づけを大切に.生活科・総合のブックレット,9,36-49.

田宮縁.（2012）.教室飼育における死の意義～教師の受容過程を中心に～.日本生活科・総合的学習教育学会第 21 回全国大会発表要旨, 211.

田宮縁・増田繁乃・鈴木なつ美.（2014）.企業や機関との連携を生かした生活科における動物飼育.静岡大学教育学部附属教育総合実践センター研究紀要, 24, 95-102.

田宮縁・長田真奈美・片野佳代子.（2012）.動物園との連携による動物飼育の意義と課題.静岡大学教育学部附属教育総合実践センター研究紀要, 20, 135-144.

三星雄大（2012）「子どもの生活に息づく生活科～ヤギの親子とすごした半年間」本生活科・総合的学習教育学会第 21 回全国大会発表要旨 p.213

文部省(日置光久・露木和男・一寸木肇・村山哲哉編集・解説)(2009)『「復刊」自然の観察』農村漁村文化研究会.

森田和良（2006）「教室飼育を続けるために：獣医師や保護者を巻き込む」.全国学校飼育動物研究会編著,『学校・園での飼育動物の成果』(pp.74-78). 緑書房.

中川美穂子（2006）「愛情飼育の教育的な意義:学齢にあつた目的と手法の工夫を」.全国学校飼育動物研究会編著,『学校・園での飼育動物の成果』(pp.34-37). 緑書房.

本研究はJSPS 科研費(基盤研究(C)25381182)の助成を受けたものです。なお、研究の一部は、第 19 回全国学校飼育動物研究大会で報告いたしました。